

週日の説教

金 大烈 神父 2010年6月11日(金)

《私達は一匹の羊(大事な存在)》

おはようございます

この聖堂のイエス像とマリア像は、50年ぐらい前からの物ですね。数十年前のご像には、今では殆ど目にしなくなった姿がありました。イエス様のご絵にもマリア様のご絵にも、今は無くしているように思いますが、昔は描かれてあった何かがありました。それはイエス様の心臓が、マリア様の心臓が刀で刺し貫かれている姿です。覚えていますか、皆様？ よく見かけましたね。違和感を持ったのか、人々がうるさくなっている時代ですから、それがいつから無くしたのかよく分かりませんが、私は子供の時にそれが気になったのです。それで「何故こんなに綺麗なマリア様の胸に、イエス様の胸に、刀が刺されているのか」と、母に聞いたことがありました。母が私に答えたそれは、「愛というものは、いつも刺されるものだ」という話でした。「イエス様もマリア様も私達の罪の為に、刀に刺される痛みをいつも感じていらっしゃるの。」という母の教えを今も覚えています。

さあ、今日はイエス様の御心の祭日ですね。そして、明日はマリア様の、お母さんの御心の記念日です。私達はイエス様の御心についてどの位分かっているのでしょうか。今日読んだ第一朗読(エゼキエル 34・11-16)、第二朗読(ローマ 5・5b-11)そして福音(ルカ 15・3-7)、全てが実際に、イエス様をよく現している箇所を紹介しています。その中で一番よく出てきた言葉は「羊」と「牧者」でした。第一朗読も同じで牧場(まきば)とか「羊」を探すお父さんの姿が、「牧者」の姿がよく話されています。

さあ、皆様、日本人で全体的に誰にでも尊敬されている人物は誰がいるでしょうか。子供達に、「この人は尊敬すべき人ですよ」と教える人物には誰がいますか。立派な生き方をした誰でも知っている有名な人。私はよく知らないので聞くのですから誰かを挙げて下さい。皆が尊敬する人物は、大体三人ぐらいはいるのではないですか。「二宮金次郎(誰かが答えました)何年前の方ですか?」とにかく、この日本の為に素晴らしい人生を過ごした人でしょう。「二宮金次郎」と言うこの方について、日本人に尋ねたら、誰でもどういう人物か、皆が分かっているでしょう。

私が何故この様な質問をするか説明しますと、私達皆が、尊敬する人物がいたとしましょう。しかし、その人物は、私個人のことは分かりません。皆様は全体的に耳にして「ああ、この人は素晴らしい生き方をなされた人だ、見習うべき人だ」と思っても、実際には、その人との個人的な関わりは何もありません。尊敬されるその人物は私のことは何も分かりません。そうでしょう。

100匹の羊がいたとしましょう。この100匹の羊は皆同じ目で牧者を眺めています。しかし、私個人が、100匹いる群れの中の一匹だと思ってしまうと、その牧者の心は絶対推し量れません。ある意味で、今日外れた一匹が始めてイエス様の御心を大事にしたかも知れません。そして、この外れた一

匹の羊が、私達、迷っている全ての人々の姿だと思います。99 匹はある意味で天使かも知れません。放蕩息子や娘でなくても、普通に生きている私達、いつも神様の愛に対して迷っている、疑っている私達、その人々を現しているのが一匹の羊だと思います。昨年も、申し上げたのですが、今まで私達は「99 匹の中にいる」と思っていたでしょうが、いいえ、この比喩は、この例え話は、一匹に当たる私達の話です。色々迷って外れてしまった私を、牧者が、父が全てを置き去りにして探す姿を見て、そして、わたしを見つけ出し、色々な人々と宴を催す姿を見て、“私はこんなにも、この方にとって大事な存在だったのか”という体験、この体験が私達に何よりも必要な体験です。全体の中の一人として、その全体を動かす存在を「あなたを愛しています。」と言っても意味がありません。

信仰とは一対一にならなければ意味がありません。皆様、具体的にイエス様と一対一にならなければならないことです。結局、ある意味で私達が少しでも努力が出来れば、神様との一対一の結び合いは必ず出来ます。はっきり申し上げます。皆様、私達は死ぬ時まで迷ってしまう一匹の羊です。そういうことによって希望が生じます。この人生、数えきれない程の痛みを体験します。その体験がなかったら絶対、目をイエス様に注ぎません。

皆様、今、召命のミサですね。司祭達、シスター達も、色々な痛みを体験しながらその召命に応えようとしていると思います。そして、どうにか応えようとしても疲れ果てて、終わりになっている修道者や司祭もいます。今も迷いながら「自分の道をちゃんと歩んでいるか」と悩んでいる人もいます。本能的な弱さによって迷う人もいます。ですから、私が何処に行っても申し上げるのは、修道生活とか司祭たちは信者がいなければ死にます。存在の意味を失います。信者の家族が祈りによって支えてくれなかったら、その司祭やシスターは死にます。そして正しく道を歩む為には、やっぱり信者の祈りが絶対的です。

仮に気に合わない司祭がいたとしましょう。その人に対してあれこれ噂話をする事より、その人の為に祈るべきです。しかし、これが自然に出来ていない雰囲気があります。私もあちこちから「ある小教区の司祭が今困っています。今休んでいます。」と耳にします。何故、尊い召命に応えて神様に仕えようとする司祭を、冷たい目で見るのでしょうか。社会的な価値観で量ろうとするのでしょうか。司祭も弱虫です。弱虫ですからもっと強く支えようとする心がなければ、結局自分達に損になることです。いつも申し上げていることですが、司祭がいなくなったら私達の一番大事なミサが出来なくなります。

今、どの教区でも、将来、司祭が少なくなったら集会祭儀をどうすればいいかと、それで悩んでいるのですが、そのエネルギーがあれば召出しを作る為に取り組みればいいことです。何にもしないで「召出しが減っている、減っている」と文句ばかり言って、自分達は何もしようとしないのです。これはおかしいです。多分イエス様の目から見ても、これはおかしいことだと思います。

私達は一人一人、一人の司祭やシスターが誕生することを願いながら信仰の生活をして、天国に行けばいいですよ。しかし、私達が愛する子孫達はどうなるのでしょうか。

皆様、今日召命の日（毎月の第二金曜日は召命のミサの日）を迎えて、もう一回召出しを願ひましょう。多分、イエス様の御心を一番喜ばせることの一つは、イエス様を模範とする牧者達が段々増えて来ることだと思います。召出しが豊かなその教会は丈夫です。問題ありません。しかし牧者がいなかったら、結局、全ての共同体が外れます。

さあ、大事な事をもう一つ申し上げます。「牧者」の役割は何でしょうか。「羊」の役割はなんでしょうか。「牧者」は「羊」に引っ張られて動かされるものではありません。「牧者」が「羊」を導きます。しかし、よく反省してみてください。この日本の教会の雰囲気は「羊」が「牧者」を何処かへ連れて行こうとします。そうでなければ追い出そうとする傾向が結構あります。昔の人が習わなくて、教養がなくて、司祭たちに従順したわけではありません。本当に愛が分かっているから、信仰が分かっているからこそ、従順しながら司祭の為に修道者の為に祈ったわけです。

私が司祭達の集まりで、結構心痛める時があります。どこかがっかりしている司祭達が多すぎる。自分はいつも「無能だ、無能だ」と言って具体的な対策は殆ど取ることなく「それは本当に出来るのでしょうか」と言うばかりです。

皆様、羊と羊飼いの役割は違います。それが平等か平等じゃないかの問題ではありません。司祭達が司祭らしくその生き方をしながら、何よりもイエス様と硬い結びの間で、本当にやりがいを感じながら、自分の命を捧げられるように皆様のお祈りをお願いします。

ありがとうございました。